

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

日本語学習者による条件表現の文脈展開機能の使用  
実態：  
ストーリーテリングにおける場面別の接続表現の分  
析から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2026-01-23 キーワード (Ja): 条件表現, 確定条件, 一回的条件文, 文脈展開機能, ベトナム語母語話者 キーワード (En): conditional expressions, factual conditional sentences, one-time conditional sentences, contextual development functions, native Vietnamese speakers 作成者: レー, ティ・トゥー・ハー メールアドレス: 所属: 筑波大学大学院 博士後期課程
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/0002000607">https://doi.org/10.15084/0002000607</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution 4.0 International License.



# 日本語学習者による条件表現の文脈展開機能の使用実態

——ストーリーテリングにおける場面別の接続表現の分析から——

レー・テイ・トゥー・ハー

筑波大学大学院 博士後期課程／国立国語研究所 非常勤研究員

## 要旨

本稿は、日本語学習者と母語話者の接続表現使用を比較し、条件表現の文脈展開機能を分析した。I-JAS コーパスを用い、発現・きっかけ・発見の3場面で中級レベルの学習者（中国語・韓国語・英語・ベトナム語を母語とする学習者）と日本語母語話者の表現を調査した。その結果、母語話者は「と」「たら」「ところ」で偶発性を簡潔に表現する一方、学習者は母語の影響や時間的な関係を表す接続表現の「とき」「て」「てから」に依存し、条件表現の使用が限定的であった。学習者が時間的順序叙述に留まる傾向が顕著で、物語展開における条件表現の運用課題が明らかとなった\*。

**キーワード：**条件表現、確定条件、一回的条件文、文脈展開機能、ベトナム語母語話者

## 1. はじめに

条件文の形式と用法に関する習得研究では、従来よりさまざまな議論がなされてきた。形式としては主に「なら」「ば」「たら」「と」の4つが挙げられ、用法は、前田（2009）によると「仮定的仮説的」「仮定的反事実的」「多回的条件文」「一回的条件文」の4つに分類される（益岡（編）1993、蓮沼ほか 2001 なども参照）。このうち、「仮定的仮説的用法」や「仮定的反事実的用法」は、条件表現以外では表しにくいプロトタイプ的な用法であるのに対し、「一回的条件文」（確定用法・事実用法とも呼ぶ）は他の表現と意味的に重なる部分が多く、その使い分けが難しい。

このように、形式も用法も多様である一方で、条件表現そのものの使い分けが複雑であるため、学習者にとっては習得が難しく、他の表現で代用可能な場合には条件表現の使用を回避する傾向も見られる。それに伴い、確定用法の使用に対する動機づけは相対的に弱まると考えられてきた。

そこで、本稿では、談話展開の観点から、ストーリーにおける条件表現の確定用法が談話の文脈をどのように効果的に展開させるかという機能に着目し、以下の課題を設定する。

課題1：異なる母語の日本語学習者が、条件表現の確定用法の接続表現を、場面の違いによってどのように使い分けしているか、日本語母語話者との比較の中で、その使用実態を明らかにする。

\* 本稿は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」（プロジェクトリーダー：石黒圭）の研究成果である。また、本稿は2021年度東アジア若手研究者合同研究フォーラム（2021年12月4日）における発表を基に修正・加筆したものである。フォーラムでコメントをくださったみなさま、本稿の執筆に際して、貴重なご意見をくださった小野正樹先生（筑波大学）、石黒圭先生（国立国語研究所）、ゼミのみなさまに厚くお礼申し上げる。

課題 2：談話の場面別における条件表現の文脈展開機能を検討する。

## 2. 先行研究

### 2.1 接続表現と条件表現

接続表現の定義については、言語学の領域によってさまざまな用語が用いられている。本稿では、市川（1978: 70）、佐久間（1992）、石黒ほか（2009）の定義を参考にし、品詞論上の「接続詞」「接続助詞」、さらに「接続的機能をもつ語句」および「接続助詞的機能をもつ語句」を対象とする。本稿は時間的展開を伴うストーリーを接続表現によってどのように描写するかに関心があるため、扱う接続表現は、条件表現の確定用法を中心とした、広義の時間的展開を表現するものに限定する。

このように本研究では条件表現の中でも特定の用法に焦点を当てるため、まずは条件文の分類とその意味的特徴を確認しておく必要がある。条件文の分類については、従来多く研究されてきたが、前田（2009）は多様なデータを分析した上で「レアリティ」の観点から条件文を、大きく「条件的用法」と「非条件的用法」に区分し、さらに「条件的用法」を「仮定的仮説的用法」「仮定的反事実的用法」「多回的条件文」「一回的條件文」の4つに分類している。この「一回的條件文」は、いわゆる「確定用法」「事実用法」に相当し、下位分類に連続、きっかけ、発現、発見の用法がある。本稿では、「一回的條件文」に焦点を当てて論じる。

- (1) 母は部屋に入ると、ドアにカギをかけた。 （連続）
- (2) 父が帰ると、子どもたちが飛びついてきた。 （きっかけ）
- (3) 食事していると、電話がかかってきた。 （発現）
- (4) 窓を開けると、彼がそこにいた。 （発見）

### 2.2 接続表現の談話の文脈展開機能

文脈は「言語表現の意図のもとに生ずる内容上の脈絡」であり、「内容を展開するについての筆者の考え方を反映する」とされている（市川 1978: 22, 88）。また、接続表現の談話の文脈展開機能は、佐久間（1992: 10）によって、「文章・談話の内部にある文脈を先へと展開させて、完結し、統一ある全体を形成して伝達する働きのこと」と定義されている。すなわち、文章・談話は文脈によって作り上げられるものである。具体的には、接続表現は、文章・談話の開始部では話を開始するという「A. 話題開始機能」、展開部では話を展開するという「B. 話題継続機能」、終了部では話を終了するという「C. 話題終了機能」、それぞれに特有の機能が認められる（佐久間 2002: 168）。このうち、B. 話題継続機能には、「b1 話を重ねる機能」「b2 話を深める機能」「b3 話を進める機能」「b4 話をうながす機能」「b5 話を戻す機能」「b6 話をはさむ機能」「b7 話をそらす機能」「b8 話をさえぎる機能」「b9 話を変える機能」「b10 話をまとめる機能」があるとされている。その接続表現の例として、b1 は「そして」「さらに」、b2 は「たとえば」「すなわち」、b3 は「そこで」「けれども」、b4 は「それから」「それで」「だから」、b5 は「ところで」「さて」、b6 は「だ

から」「だけど」「でも」、b7は「で」「ただ」、b8は「でも」「だけど」「しかし」、b9は「ところで」「じゃ」「しかし」、b10は「要するに」「ゆえに」など、主に接続詞を中心に上げられている。本研究では、時間軸に沿って話をどのように展開させているのかを考察するため、「B. 話題継続機能」に焦点を当てる。

市川（1978）は文章の中の文の接続関係の指標として「接続詞」と「接続助詞」を含む「接続語句」を上げているが、文の接続関係をめぐる議論は「接続詞」のみに注目している。市川（1978）の理論に基づく先行研究として、原田（2005）および範（2013）は中国語母語話者による日本語文の文脈展開を考察しているが、いずれも接続詞のみを対象としている。

砂川（2017）は、ストーリーの談話展開における「そこで」「それで・そして」「ところ」などの接続詞と「と」「たら」「とき」などの接続助詞を、「継起関係」「同時関係」「因果関係」「添加」という4種類の順接表現に分類し、その機能を解明した。日本語母語話者は、時間関係や因果関係、予期せぬ出来事の表現などに応じて順接表現を戦略的に使い分ける一方、学習者には特定表現の過剰使用や誤用が見られた。その中で、条件表現の一回的条件文についても考察がなされた。この用法は「新しい認識の成立」と「展開を予想させる形式」という性質をもち、蓮沼（1993）の分類による「発現」（前田2009の分類の同名の「発現」に相当）と「反応」（前田の分類の「きっかけ」に相当）のみが上げられ、しかもこれらは談話において同様の効果を持つとされている。

時間関係を表す接続表現の習得にかんして、董（2020）は、作文データを扱い、文章における中国人日本語学習者による「と」「たら」「て」「てから」「それから」「そして」などの継起の接続表現の使用実態とその習得過程を考察している。その結果、ある程度学習歴がある学習者は継起の接続助詞を使用できるようになるものの、条件形式と時間関係形式を区別し得るかや、それらを効果的に使用しているかどうかについては論じられていない。また、小口（2017）では談話においても、ストーリーテリングのタスクを通じ、継起の接続表現の談話展開機能を論じているが、一回的条件文の「きっかけ」用法のみにとどまっている。要するに、文脈展開の観点から接続詞と接続助詞の比較、さらに研究によってそれぞれの効果を論じられているものの、一回的条件文の下位分類まで検討されていない。

一方、一回的条件文の習得にかんして、孟（2021）では、様々なコーパスを用い、中国人日本語学習者による用法の観点から条件形式の使用実態を考察している。

概して、接続表現の使い分けや練習問題を扱った研究や書籍は数多く存在するが、用法を理解できたとしても、それが必ずしも運用能力の向上につながるわけではない。また、同様の出来事を描写する場合、複数の選択肢がある中で、複雑な条件形式を使用することは必ずしも優先的な選択とはならないと考えられる。

そこで本稿では、談話の文脈展開機能の観点と用法の観点から、条件形式がどのように使いこなされるのかを、具体的な場面を通して分析する。

文脈展開において、接続詞と接続助詞は「品詞の上で異なっても、文脈展開の上では同様な機能をもつ」（市川1978）あるいは「意義上は共通する」（佐久間2002）とされている。しかし、

先行研究においては、接続表現といえば主に「接続詞」に偏っている。本稿では、「接続助詞」、特に「条件の接続助詞」を対象とする。こうすることで、接続表現一般についての日本語学習者の使用実態をより具体的に明らかにすることを試みる。

また、以上の研究では、中国語、韓国語、英語圏の母語話者を主に対象としており、日本国内外で学習者数上位を占めるベトナム語母語話者（国際交流基金 2023、文部科学省 2022 による）を対象とする研究は見当たらない。

ベトナム語の条件表現の体系には、日本語の「仮定的仮説的用法」「仮定的反事実的用法」「多回的条件文」に対応する用法はあるが、「一回的条件文」に対応する用法は存在しない（Le 2005: 52）。この体系上の相違から、「一回的条件文」は習得が難しいと予測される。事実、教育現場でもベトナム語母語話者による使用例はあまり見られない。この点については、他の母語話者を対象とする研究からも一定の示唆が得られるが、それはあくまでも参考程度にとどまる。

さらに、条件表現を対象とした研究のみならず、ベトナム語母語話者を対象とする研究は全体として少ない。一方、日本国内の外国人労働者の中で、ベトナム人労働者数は年々増加し、全体の4分の1を占めている（厚生労働省 2025）。このような状況を踏まえると、ベトナム語母語話者に対する日本語教育の充実が一層求められていると考えられる。

### 3. I-JAS のストーリーテリングのタスクでの調査

#### 3.1 分析対象

本研究で使用するデータは、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス（International Corpus of Japanese as a Second Language）」（以下、I-JAS）のデータを使用する。I-JAS は様々な言語を母語とする日本語学習者を対象とし、話し言葉および書き言葉を横断的に収集した大規模コーパスである（追田 2020）。

このコーパスの調査対象は、第一次から第三次の公開データに含まれる、同時期に調査が行われた母語話者（以下、特に指定しない場合は日本語母語話者を指す）50名および、中国語・韓国語・英語・ベトナム語を母語とする日本語学習者各50名、計250名である。その中には、初級・中級・上級の異なるレベルの学習者がいるが、すべての母語話者に共通して揃っているのは中級レベルのグループのみである。また、初級レベルの学習者は接続表現にかんする知識が十分ではない可能性が高く、形式間の比較が難しい。一方、中級レベルは、基本的な接続表現を導入されたと思われ、かつ高度な用法への発展途上にあるため、使用の広がりや誤用傾向を分析するのに適していると判断できるので、本稿では中級レベルの学習者を対象とする。

学習者の日本語レベルは、SPOT90の結果に基づいて判定している。具体的には、中級レベルに該当する学習者は、中国語母語話者41名、韓国語母語話者27名、英語母語話者35名、ベトナム語母語話者28名である。

談話のデータとして、I-JASの「ピクニック」をテーマとするストーリーテリング1（ST1）のタスクを使用する。このタスクは条件表現の一回的条件文が現れる場面であると判断し使用することにした。

このストーリー（図1参照）は、「ピクニックに出かけようとしているケンとマリが地図を見ている」際に、「犬がバスケットに入る」という予想外の出来事が同時に起こり（コマ2）、後の展開の原因として示されている。続いて、「バスケットを開けた」ことをきっかけに、「犬が中から飛び出す」（コマ4）という意外な出来事が発生し、さらに「バスケットの中を見た」という動作によって、「食べ物がすべて食べられていた」（コマ5）という期待外れで残念な結果を発見する。このように、原因→予想外の出来事→発見の結果という流れでストーリーが展開している。

これら3つの場面は、時間的な流れに沿った事実を語るのみでなく、予想外の出来事とそれに伴いケンとマリが直面する問題と二人の態度、感情のニュアンスの描写が求められる課題となっている。

前田（2009: 73）による条件文の分類に従うと、コマ2は「前件の継続的状态が存在している時に後件が発生する場合」に該当する発現用法、コマ4は「異主体による動作が連続する場合」に該当するきっかけ用法、コマ5は「前件動作により後件の状態が発見される場合」に該当する発見用法と考えることができる。これら3つの場面は、いずれも、条件の接続助詞の「と」によって表現可能な場面である。

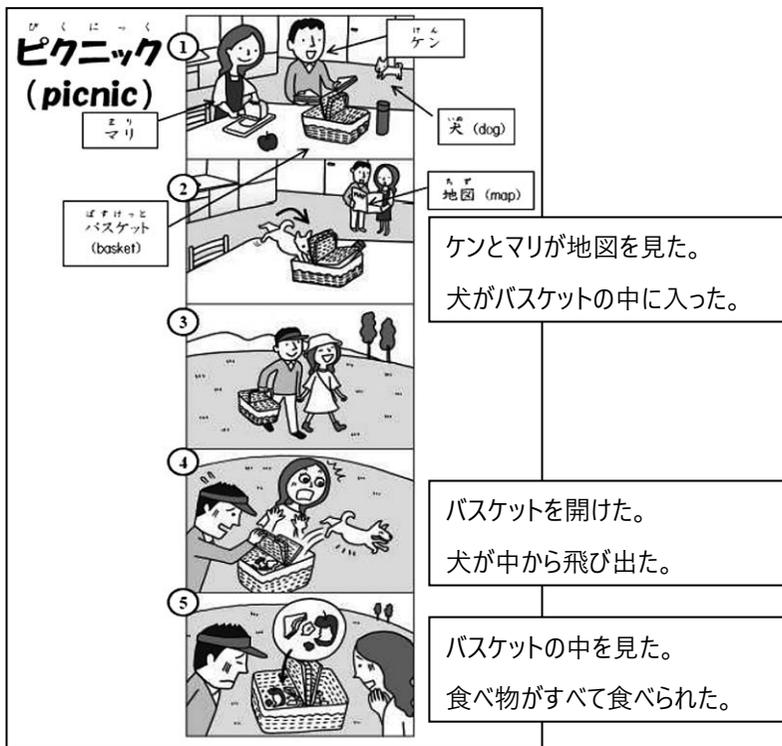


図1 ST1のイラスト

### 3.2 手続きと分析方法

本調査の目的に基づき、以下の手順でI-JASのデータを処理した。

まず、プレーンテキストのデータをダウンロードし、各発話を場面ごとに分類した後、前件と後件をつなげる接続助詞と接続詞の形式を抽出し、その接続表現を表1のように分類した。加えて、「突然」「すぐに」と突発性を表す副詞や話し手の驚きを示す語彙、表現に含まれるニュアンスを補足する表現についても集計を行った。

つぎに、話し手ごとに、1文の場合は接続助詞、2文となる場合は接続詞を優先して集計した。接続助詞と接続詞を複数使用する場合、主たる表現を1つとし、残りの表現は補足的な表現として記録した。なお、学習者が1つの場面を記述する過程で表現を変更した場合、それを話し手による表現の選択過程と捉え、最終的に使用された表現を話し手が選択した表現として扱った。一方で、調査対象の場面に対する内容が省略されたり2つの節のいずれかが欠けており出来事間の文脈的なつながりが示されていない場合、話し手が絵の内容を十分に理解していないと判断され、当該場面のデータは分析対象から除外した。

接続表現の分類は節と節をつなげる接続助詞と、文と文をつなげる接続詞の2つに分けた。時間関係を表す「トキの接続助詞」については、聞き手に与えるニュアンスの違いに着目し、「意外性を表せる」「意外性を表せない」に分類した。

表1 接続表現の分類

接続表現	産出形式
条件の接続助詞	と、たら
トキの接続助詞 1 <sup>1</sup> (意外性を表せる)	途端、ところ、瞬間、途中
トキの接続助詞 2 (意外性を表せない)	時・際、て、あと(で)、てから、うち(に)、間(に)
因果の接続助詞	から、て
同時の接続助詞	ながら
逆接の接続助詞	が・けど・けれども、のに
条件の接続詞	すると、そしたら
トキの接続詞	この時、その時(に)、あの時、その間(に)、その隙、そのうち
逆接の接続詞	でも、しかし

### 4. 異なる日本語学習者による場面別の接続表現の使用

学習者は、どのような表現で予想外の出来事の原因から結果という文脈を展開するのか、場面ごとの接続表現の使用実態とその特徴を明らかにする。

後述の表2、表3、表4では、2つの事実を結びつける接続表現が用いられた話者の人数と、( )内に該当する各言語の母語話者全体の使用数に対する割合(小数点第1位で四捨五入した)を示している。また、数字の下に使用された形式を示す。その際、同一項目に複数の形式が見られる場合には、使用頻度の高い順に列挙する。

<sup>1</sup>この論文では、便宜上、「途端」「瞬間」など名詞の副詞的用法も接続助詞として扱う。

本研究で扱う「一回的条件文」は、特定のストーリー文脈に依存して出現する傾向があり、ストーリーが変化すれば使用状況も変わる可能性がある。そのため、量的分析を行うに足る十分な用例数を確保することが困難である。また、条件表現が出現可能な場面は限られており、本稿では「ピクニック」を描写する談話において産出される具体的場面を抽出し、使用頻度の高い順に提示した上で、各場面の意味と使用状況、使用の意図を文脈に即して詳細に分析する。これにより、少数事例であっても、文脈に基づく解釈の深まりや、使用条件の精緻化が可能となるため、質的分析が最も適切な方法であると判断した。

#### 4.1 コマ2「犬がバスケットに入った」(発現)

表2では、トキの接続助詞2の母語話者別使用率は日本語 38%、ベトナム語 54%、英語 40%、中国語 61%、韓国語 56%と、英語の母語話者以外いずれの母語のグループにおいても産出が最も多く、母語話者と学習者の間に共通点が認められる。この場面では、「とき(に)」が最も多く使用され、次いで「間(に)」「うち(に)」,そして「て」の順で使用されている。英語の母語話者の用例では、文法的に不適切な「て」の接続助詞の用例も見られたが、「その時」によって意味が補足されていた。

- (5)<sup>2</sup> 二人は、地図を、{見る時に}, 犬さんは、ハ、バスケットに、入りました (VVN29)<sup>3</sup>  
 (6) どこかに行くか考えて地図を {相談して}, その時, あの一、気づかないで、犬を、犬はバスケットに入ってしまった (EAU37)

以上のトキの接続助詞の形式に近い「その時(に)」「そのうち」「その間(に)」といったトキの接続詞も、英語以外のいずれの母語話者による産出において使用が見られた。中でも、母語話者とベトナム語母語話者においては、他の言語の母語話者に比べて特に使用頻度が高い傾向が見られた。一方、母語話者は「その隙に」の使用もあった。これは、前件の動作が進行中にわずかな時間に後件の動作を行うことを表すものである。

- (7) その後二人は地図を見えています。{その時} 犬は、バスケットにはい、入りました でも二人はわかりませんでした (VVN18)

条件の接続助詞と条件の接続詞は、母語話者にのみ使用されていた。しかし、条件の接続助詞7件のうち4件は、「その時」「その間に」といった接続詞や「うちに」といった接続助詞とともに出現している。母語話者の使用から見ると、この発現の場面では、条件の接続表現は理論的に使用できるが、トキの接続表現の方が話したい意図が十分に伝わり、一般的に使用されると考えられる。

<sup>2</sup> 例文では、{ } 内に注目すべき表現を、下線部に意味補足として使われる表現を示している。

<sup>3</sup> 例文末尾の( )内には、I-JASで使われている学生IDを示している。なお、冒頭3文字の「JJJ」は日本語母語話者、「VVN」はベトナム語母語話者、「EAU」は英語母語話者、「KKD」は韓国語母語話者、「CCH」は中国語母語話者を表す。

- (8) えっとケ、えーケンとマリが地図を {見ていると}、んバスケットの中に、い犬がは入っ  
てしまいました (JJJ01)
- (9) え出かける前に二人が、えー地図を {見ていると}、その間に、犬が、バスケットの、中  
に入ってしまった (JJJ12)
- (10) ピクニックに一行くー行き先を地図で {調べていると}、知らないうちに、えー犬が、その、  
サンドイッチを入れたバスケットの中に入っていました (JJJ51)

表2 発現の場面における接続表現の使用実態 (単位: 名 (%))

接続表現	日本語 母語話者 50名	ベトナム語 母語話者 28名	英語 母語話者 35名	中国語 母語話者 41名	韓国語 母語話者 27名
条件の 接続助詞	7 (14%) と, たら	0	0	0	0
トキの 接続助詞 1	4 (8%) ところ	1 (4%) 途中	0	0	3 (11%) 途中
トキの 接続助詞 2	19 (38%) 間, とき	15 (54%) とき, うち, 間	14 (40%) とき, 間, て	25 (61%) とき, 間, うち	15 (56%) とき, 間, うち
同時の 接続助詞	0	0	12 (34%) ながら	1 (2%) ながら	0
逆接の 接続助詞	0	0	0	1 (2%) のに	1 (4%) けど
条件の 接続詞	1 (2%) そしたら	0	0	0	0
トキの 接続詞	11 (22%) その間 その隙 その時	8 (29%) その時 そのうち この間	0	5 (12%) その時 そのうち	2 (7%) その時
逆接の 接続詞	0	1 (4%) でも	0	1 (2%) でも	1 (4%) でも
複数	0	1 (4%) しかし+その時	0	0	0
接続表現なし	1 (2%)	2 (7%)	1 (3%)	5 (12%)	3 (11%)
1節以下	7 (14%)	0	8 (23%)	3 (7%)	2 (7%)

一方、英語の母語話者は、同時進行の意を表す「ながら」を使用していた。これは他の母語話者には見られない用法であり、英語の母語からの影響が示唆される。また、中国語と韓国語の母語話者の産出には、逆接の接続表現を用いて望ましくない出来事を表現する傾向が見られた。

- (11) 地図を {見ながら}、ペットの犬はバスケットに入りました (EAU03)
- (12) ピクニックのあーにちをうーん {探していますけど}、あーその時に犬はバケットの中に入りました (KKD20)

4.2 コマ4「犬が中から飛び出した」(きっかけ)

表3 きっかけの場面における接続表現の使用実態 (単位: 名 (%))

接続表現	日本語 母語話者 50名	ベトナム語 母語話者 28名	英語 母語話者 35名	中国語 母語話者 41名	韓国語 母語話者 27名
条件の 接続助詞	27 (54%) と, たら	4 (14%) と = たら	5 (14%) と, たら	8 (20%) たら, と	5 (19%) たら, と
トキの 接続助詞 1	12 (24%) ところ, 途端 途中, 瞬間	3 (11%) 途中	2 (6%) ところ	2 (5%) 途端 が早い	1 (4%) 瞬間
トキの 接続助詞 2	2 (4%) とき	12 (43%) とき て, てから	17 (49%) とき, て てから	21 (51%) とき て, 後	9 (33%) とき て, 後
逆接の 接続助詞	0	0	2 (6%) が・けど	0	0
条件の 接続詞	2 (4%) すると	1 (4%) そしたら	0	0	0
トキの 接続詞	0	1 (4%) その時	0	0	0
接続表現なし	0	1 (4%)	0	2 (4%)	1 (2%)
1 節以下	7 (14%)	6 (21%)	9 (26%)	8 (20%)	11 (41%)

きっかけ場面では、表3に示すように、母語話者は、条件の接続表現や、「途中 (に)」「ところ」「途端 (に)」など時間的に極めて短い瞬間を表し、意外性を伴うトキの接続助詞1を集中的に使用している。この場面は、バスケットの中にいるはずのない犬が突然飛び出すという、ストーリーの転換点にあたる。条件の接続表現は、このような転換点のマーカースとして展開を効果的に導く機能を果たしていると考えられる。

(13) お弁当を食べるなんなって、バスケットを {開けると}, ペットの犬が飛び出して来ました (JJJ02)

(14) 丘に着いたところで、ちょうどお昼にしようと思ってバスケットを {開けたところ}, 中からなんと犬が出てきたと、ゆうことです (JJJ46)

一方、学習者も条件を表す接続助詞を使用しているが、「とき」「後」「てから」など、意外な出来事や予想外の展開を表すことのできないトキの接続助詞2を使用する傾向が見られた。これらの表現には意外性や予測できない状況を示すニュアンスは含まれていないため、物語の転換点を表現するには、「でも」「しかし」などの逆接の接続詞や、「突然」「すぐ」などの時間的様態を表す副詞、あるいは「びっくり」「驚き」といった感情表現に依存せざるを得ない状況が見られた。また、ごく一部であるが、「が」「けど」の逆接の接続表現で予期しない出来事を予告するのに使われる例が見られた。

(15) 二人がとても楽しくて {やっている時}, 犬は突然に, バスケットから飛び出しました

- 二人はとてもびっくりして (CCH08)
- (16) ピクニックの所に、あピクニックの所にき、来てから、突然バスケットの中から犬が出ました 二人はとてもびっくりします (VVN18)
- (17) でも、バスケットを「開けたとたん」に、あー、犬は、そ、外にーうん、飛びだし、飛び出しました うんー、二人はほんとにびっくりしました うん、その犬がうんー、遠く走ってき、行きました (CCH46)
- (18) あーピクニックのスポットを、を決めた後で、あーバスケットを「開けた、開けました、が」、急に犬があーいて、あーケンとマリはびっくりしました (EAU32)

このように、きっかけの場面においては、母語話者と学習者の間に対照的な傾向が見られた。ストーリーの転換点を示す際、母語話者は条件の接続表現を適切に活用するのに対し、学習者は自身の使える範囲の中で、さまざまな表現を組み合わせて伝えようとする傾向がある。その結果、学習者の文章はストーリーの流れが単調になるか、あるいは文が長く複雑になりがちである。しかし、話し手の観点を表そうとして多くの表現を使うと、ストーリーのリズム、含みが失われてしまい、伝えたいニュアンスが適切に伝わらなくなる可能性があると考えられる。

#### 4.3 コマ5「食べ物が食べられた」(発見)

この発見場面では、前件である「バスケットを見る」という出来事が明示的に描写されず、後件の結果のみが叙述される傾向が認められる。前件の描写が省略される場合、学習者は、コマ1からコマ4までの先行文脈との連続性を確保するため、「それで」によって結果を明示したり、「でも」を用いて予想外の結果を提示したりする傾向が見られた。特に、「そして」や「それから」などの時間的接続表現を用い、事象の時間的推移に沿って結果を述べる事例が多い。一方、母語話者は接続表現をほとんど用いず、「バスケットの中のサンドイッチは食べられてしまっていました (JJJ55)」のように、「～は／が～」構文を用い結果のみを叙述する傾向が顕著である。

- (19) そのバスケットの中は、中に、入れていた、サンドイッチは、その犬に、食べられてしまった (JJJ06)
- (20) バスケットの中を「見ると」えー作ったサンドイッチは全部食べられてしまいました (JJJ12)
- (21) お昼ご飯を食べようと、えーバスケットを「開けたところ」、犬が、えーサンドイッチ、を、全部、食べてしまいました (JJJ04)

前件と後件がともに明示される場合に使用される接続表現について検討する。前件が明示されている場合、母語話者は、条件を表す接続助詞「と」「たら」あるいは「ところ」の3種類を用いて、発見の契機を表現する傾向が見られた(用例(20)(21))。

表4 発見の場面における接続表現の使用実態 (単位: 名 (%))

接続表現	日本語 母語話者 50名	ベトナム語 母語話者 28名	英語 母語話者 35名	中国語 母語話者 41名	韓国語 母語話者 27名
条件の 接続助詞	19 (38%) と, たら	4 (14%) と	3 (9%) と, たら	5 (12%) たら, と	7 (26%) と, たら
トキの 接続助詞 1	4 (8%) ところ	0	0	0	0
トキの 接続助詞 2	0	5 (18%) て, とき	4 (11%) とき, て, てから	8 (20%) て, とき, てから	1 (4%) て
因果の 接続助詞	0	1 (4%) から	0	0	0
逆接の 接続助詞	0	0	0	0	1 (4%) が
トキの 接続詞	0	0	0	1 (2%) その時	0
接続表現なし	0	0	0	0	0
1節以下	27 (54%)	18 (64%)	28 (80%)	27 (66%)	18 (67%)

一方、学習者においては、多様な表現で示す傾向が見られた。

ベトナム語・英語・中国語を母語とする学習者は、この発見場面においても、トキの接続助詞2を使用する傾向が見られた。特に、食べ物が食べられたことを発見した時点を表す「とき」以外では、発見という出来事が「見る」という動作の後に続くため「て」や「てから」によって、単に動作の時間的順序のみを表すことが多く見られた。

一方、韓国語を母語とする学習者は、意外性を表す条件の接続助詞の使用傾向において、母語話者に最も近い特徴を示している。さらに、順接の接続助詞を使わない場合は、逆接の接続助詞の「が」で意外性を表す様子が認められた。このように、韓国語を母語とする学習者は積極的に予期しない結果、意外性を表そうとするのに対して、中国語・ベトナム語・英語を母語とする学習者は接続表現で意外性を表すのを避け、主に時間的な関係の叙述にとどまる傾向が見られた。

#### 4.4 ストーリー全体の表現の使用

以上、コマ2、コマ4、コマ5の場面における母語話者と学習者による接続表現の使用について見てきた。この「ピクニック」というストーリーテリングタスクでは、話し手は時間順の単なる情報の伝達ではなく、聞き手がストーリーの展開を円滑に理解できるように配慮し、物語に多様性や表現上の工夫を加えることも重要である。ストーリーにおける「意外性」や「予想外の展開」は、登場人物の感情や受け手の共感・驚きといった要素を生み出し、物語の面白さや内容の厚みを与える役割を果たすと思われる。

コマ4の「犬が飛び出す」という出来事はストーリーの中で意外性が強調される場面である。一方、コマ2の「犬がバスケットに入る」という出来事は想定外の出来事であり、これが「犬が飛び出す」という次の展開の原因となる。さらに、コマ5では、予想外に「食べ物が食べられた」という結果につながっている。これら3つの場面では、時間関係と因果関係を表現するだけでな

く、登場人物が直面する予想外の状況を描写する必要がある。この意外性を表現するため、「接続表現」, 「副詞」, 「知らなかったことを知ったことの表現 (用例 (22))」そして「出来事に対する登場人物の反応や感情」という4つの手段が使われる様子が認められた。

- (22) んー、サンドイッチを作る時に、作って、あーどこへ行くか、二人で、メブを地図を、{|みーた時に|}, マリとケンの犬が、サンドウイチの近くで、あや、あやかし? あやかしことを一します、するけど、二人は全然きづなか、きづなかつたです  
あー二人は、あー近くの公園に行く決めて、公園に行く、い、行って、サンドイッチを食べ、{|食べようと、する時に|}, あー、あ中をみ、{|見たら|}, サンドイッチがいなかったです  
マリは驚いて、何でこんなこと、があるかなーって思った、思って犬を見たら、犬が、おー、犬ー犬が食べ、犬が食べー、あ、いべ、犬が食べーたこと気づーいてしまったので、そして、あーマリとケン、あ、サンドイッチなしに、ピクニックだけをしました、はい  
(KKD40)

母語話者は4つの手段の中で条件形式をもっとも積極的に使用し、特に「と」を用いて予想外の出来事と予想外の結果を表している。しかし、3つの場面のうちコマ2では、条件表現より時間関係を表す接続助詞・接続詞の使用が過半数を占めている。一方、学習者はいずれの場面においても、時間関係を表す表現を多用する特徴がある。特に、学習者は意外性を表すために、逆接の表現によって2つの出来事をつなげていた。これは母語話者には見られない使用である。

- (23) あー、そ、びっくりした二人は、あー、バスケットの中をー{|見ましたが|}, そのの、そのの中に、あったサンドイッチは、もう、犬が、食っ、てしまいました あー食って、しま、あ食って、おーもうーかけらもー、なかつたです  
(KKD46)

また、「でも」「しかし」といった逆接の接続詞の使用について、コマ2・4・5の前件と後件の間のみならず、談話全体においても、学習者は意外性の予告を強調するため、様々な箇所逆接の接続詞を繰り返し用いる様子が見られた。

- (24) でも、うー二人は地図を{|見る時|}, うー二人の犬は、そのおーそのサンドイッチーをう、サンドイッチがある、バスケットを、に、うー、き、え、えーバスケットーにいます で、うーしかし二人はそのことは全然わかりません  
うーサンドイッチを食べる、うー{|食べる時|}, その犬、その犬は、あーバスケットーから{|笑|}, ぬ、ぬ{|笑|}, 脱がれ、脱がれました  
あーでも、そのサンドイッチは、全部、いー犬をーあー食べられました、はい  
(CCH13)

## 5. 出来事の描写における条件表現の文脈展開機能について

### 5.1 発現場面

この節では、「犬がバスケットに入った」という発現場面において、母語話者と学習者の双方によって最も使用される「とき」「間」と、母語話者のみによって使用される条件表現の「と」「たら」「ところ」について検討する。

条件表現の発現用法について、豊田（1978）は、「…赤い花を取って遊んでいると、お母さんが…と呼びました」といった前件が後件に働きかけず、かつ前件が状態・継続、後件が動作の開始移動という特徴をもつ構文を、後件の行われる時の意味を表す「時」の意味として分類している。また、蓮沼（1993: 78）は、前件が継続的な動作を表し、その状況のもとで新たな事態の出現やそれに対する認知が後件で表されるとしている。さらに、中島（2007: 243）も、前件と後件が同時的な関係にありながらも、話し手の認識の流れとしてまず前件に目が向けられ、その後には後件が認識されるという視点の移動、いわば心理的な継起関係が成立していると捉えている。これらの議論に共通するのは、「と」が「とき」と同様に時間的関係を表す一方で、「とき」とは違い、新たな事態の認識の成立という展開を示すという点にある。これによって、ストーリーの次に生じる可能性を示唆し、読み手の予想を促す機能を有することが示される。

- (25) ピクニックに一行く一行き先を地図で「調べていると」、知らないうちに、えー犬が、その、サンドイッチを入れたバスケットの中に入っていました (JJJ51)

しかしながら、新たな事態の認識に関連して、久野（1973）は、物語調の特徴として「自分の行動をあたかも第三者の行動であるかの如く記述する」と述べている。このような話し手と登場人物の役割の曖昧さから、話し手は自らを登場人物になぞらえ、出来事を語ることもあると考えられる。この発現場面において、ストーリーを語る話し手は、当然後件の「犬がバスケットの中に入る」という事態を把握するはずであるが、主人公のケンとマリはその事実を認知していない。このように、事態の認識に話し手とストーリーの登場人物との間にギャップが生じている。その結果、新たな事態の認識が成立したかどうか曖昧となり、「と」が本来持つ予想を促すという展開機能が弱まると考えられる。

一方、「とき」「間」は、ある状態が継続している時間内にある事態が起こるあるいは行為を終わらせる意味を表す表現であるとされている（市川 2011）。また、庵ほか（2008）は、これらの形式を「ある出来事が起こるときに他の出来事が起こることを表す表現」と述べている。このように、「とき」「間」は時間的な枠組みの中で事態の生起関係を表すが、これに対して「と」「たら」「ところ」は、話し手の予測に反する意外性や発見のニュアンスを伴う表現として用いられる点に相違がある。すなわち、「とき」「間」は意外性のニュアンスを提供せず、単に時間的関係のみを表す機能に特化した形式であるといえる。

- (26) 地図を見て、どこへ行こうかと「話している間に」、バスケットの中に、子犬が、入りました き、気づかずに二人はピクニックへ出かけました (JJJ07)

接続助詞の「ところ」の意味については中里（1994: 142）が次のように分類している。

1. A と B に何らかの関連性がある場合
  - (a) A は目的の予想・期待を伴う行為。B は A の結果 [順当な結果／予想外の結果]
  - (b) A は明確な目的の予想・期待を伴わない行為。B は A への反応
  - (c) A は明確な目的の予想・期待を伴わない行為。B は A をきっかけとする発見
2. A, B が一連の出来事の順を追った描写となっている場合
3. B が A の行為・動作・状態を中断する事態となっており、そこから場面が転換する場合

この発現場面における「ところ」は前件の「地図を確認する」の動作の最中に「犬がバスケットの中に入り込み」が起こったことを表し、分類2に該当する。中里（1994）は他の分類は意外性を表し、前件と後件の「内容に関連性をもたせる」と指摘しているのに対し、分類2は時間的な前後関係の描写自体に意味があると述べている。また、母語話者の使用には「～ていたところ」「～しているところ」の両方が見られたが、庵ほか（2008: 395）は、前件と後件の「出来事が同時で主文のテンスが過去の場合には、「～ている／～ていた」のどちらでも言い表せます」と述べている。本発現場面においても、この指摘が当てはまると考えられる。

- (27) えー、と、そ、ピクニック先をえー地図でえー {確認しているところ}、えー、い、えー、ペットの、犬、犬が、えー、バスケットの中に入り込みました (JJJ56)

本場面の特徴として、まず「ケンとマリが地図を見た」という行為と「犬がバスケットに入った」という出来事が同時進行で生じている点がある。このような場面では、時間的な関係の「とき」「間」「ところ」や条件表現の「と」「たら」が使用可能であるが、時間的な関係の使用が圧倒的に多く見られた。物語の転換点を始めから提示してしまうと、面白さが損なわれるため、ダイナミックな展開を強調する必要性は必ずしも高くない。むしろ、この場面では認識より同時進行の意味を表すことが重視されるべきであると考えられる。

## 5.2 きっかけ場面

この節では、「犬がバスケットから飛び出す」というきっかけ場面において、母語話者が多用する条件の「と」「たら」と「ところ」「途端」「瞬間」などと、学習者が多用する「とき」、かつ「て」「てから」「後」の使用について検討し、解説する。

この場面は、ストーリーの中で発現場面として潜んでいた原因が顕在化し、それに伴って発生した出来事が次の場面の結果認識へとつながる、物語展開上ダイナミックな転換点を持つ重要なシーンである。ここでは、前件の動作が後件の出来事のきっかけとなり、物語の進行を促す役割を担う。母語話者は、このような場面で条件表現「と」「たら」に加え、意外性を表現する「ところ」(中里 1994) や、突発性を示す「瞬間」「途端」を用いる傾向があることが確認された。

きっかけ用法の「と」の使用によって、話し手は「出来事の陳述とともに意外性」を表すことができる(小口 2017)。一方、「たら」は、「話し手が外部からの視点で」陳述する「と」(蓮沼

1993, 前田 2009) と異なり, 後件の事態が話し手自身に起こる事態に用いられる (前田 2009)。したがって, このきっかけ場面では, 「たら」より「と」のほうが適切と考えられる。実際には「と」の使用が「たら」よりやや多いものの, 「たら」の使用も多く (12 件 / 27 件) 見られた。この理由として, 第一に, 5.1 節で述べたように, 物語調の中で話し手が登場人物の視点から自らの体験として描写する場合があること, 第二に, 話し手が会話の中でストーリーを語っているため, 話し言葉の影響が及んでいることが挙げられる。

学習者においては, 「とき」「て」の使用が圧倒的に多く確認された。「とき」は, 一回的な出来事や継続する事態に関する時間の設定に用いられる表現であり (庵ほか 2007), 比較的広い用法を持つことから, 学習者にとって使用しやすい表現であると考えられる。また, 「て」「てから」「あと」は, 「出来事が連続して起こる継起」を表す表現であり (庵ほか 2007), 多くの場合, 前件と後件の主体が同一である。

さらに, 条件表現においては, 同一主体の一連の動作を表す連続用法も存在し, 前件と後件が同一主体による連続した動作である点で, 「て」などの継起表現と共通する側面を持つ。しかし, 連続用法では, 前田 (2009) が指摘するように, 前件と後件が一連の動作でありながらも, 2つの場面に大きく分けられるという特徴がある。一方で, 「て」はそのような場面の切れ目を伴わない。このような条件表現の連続用法, きっかけ用法と「て」の使い分けは, 学習者にとって困難点であると考えられる。

### 5.3 発見場面

この節では, 「食べ物が食べられた」という発見場面において, 母語話者が多用する条件の「と」「たら」と「ところ」などと, 学習者が多用する「とき」, かつ「て」「てから」「後」の使用について検討し, 解説する。

条件表現の発見用法は, 前件の動作によって後件で発見される対象の存在や状態, あるいは話し手の知覚・認識を表現する用法であり, これについては豊田 (1979), 蓮沼 (1993), 前田 (2009) によって指摘されている。発見用法の場合と同様に, 発見用法も, 「新たな局面の展開」を表し, 後件の事態を認識することを表す (蓮沼 1993)。また, 発見用法も, きっかけ用法・発見用法と同様, これら一回的条件文はいずれも, 「新たな状況」における「新たな認識の成立」という点で一致しており, これが意外性や驚きのニュアンスをもたらす効果を果たす (蓮沼 1993)。

「とき」「て」「てから」といった時間的關係を表す接続表現は, 学習者の使用にのみ確認され, 母語話者の使用は見られなかった。また, これらの表現のみでは事態の認識を十分に表現できないため, 学習者は「わかる」「気付いた」などの語彙を併用し, 認識の変化を補足しようとする様子も確認された。

(28) マリとケンが地図を {見ている間に}, 犬がバスケットの中に入ってしまった。二人がバスケットを {開けると}, 犬がバスケットの中から飛び出てきました。

マリとケンが, バスケットの中を {見ると}, 中の食べ物が全て食べられてしまいま, 食

べられていました

(JJJ11)

- (29) でもえーあかごをえー {開けた開けた時} えーえーあさんどいあ料理をな料理がなくなっ  
てしまった。え二人はえーあーさっきえーさっき見たさっき見たえー犬はえーえー料理を  
食べたーあー食べたのーが、きづあーのに気づいてえーえっとーあー怒りました

(VVN48)

これは、ストーリーの冒頭にある発現場面で、登場人物が「気づかなかった」と述べることで事態の非認知を示し、その後、認識に至るまでの流れを、明確な語彙を用いて表現する例も確認された。

- (30) あーそして、二人はあー作りー、作った、サンドイッチを、バスケットに入ってから、あ  
地図を、みまし見ました でも、あーその、その犬は、その犬は、あんーバスケットに、入っ  
た あー二人の、作った、んー、サンドイッチは、食べしまいました。でも二人はきづき  
づなかつたです。(略) あ二人は、あーその時、あーじあーじぶ自分の、んーも自分の、んー  
持って、ばすバスケット、んー、の、あバスケット中の、物を、あーりんごとか、サンド  
イチとか、あー犬に、んー食べられしまいました、ということをきづ、しました

(CCH32)

「ところ」の用法については、5.1節で述べたように、中里(1994)の分類1(a)に該当しており、後件には予想外の結果が表現される。この予想外の結果について、正宗(2001:6)は、「前件は、後件が起こる場を提供していて、意外性や、予想どおりという意味合いが出て来る」としている。また、田山(1982)は、「V-たところ(が)」の形で、後件で結果を表し、さらに「が」をつけた場合、その結果に「予想や意に反してという気持ちが入り意外性を付与する」と述べている。

この発現場面において、接続表現を使用する場合、母語話者は「と」「たら」「ところ」のみを用い、簡潔に予想外の結果を表現する傾向が見られた。それに対し、学習者は出来事の陳述を伴い、自身が運用可能な範囲の表現を用いて、認知を示す「気付いた」や、感情を表す「残念」「寂しい」などによって、事態の様子を描写しようとする傾向が見られた。

## 6. おわりに

談話の各場面における母語話者と日本語学習者の接続表現使用には明確な特徴が見られる。発現場面では、両者ともに「とき」「間」などの時の接続表現で同時進行を表すが、条件表現は母語話者のみが使用し、学習者には母語別の独自用法(英語話者の「ながら」、韓国語話者の逆接表現)が現れる。きっかけ場面において、母語話者は条件の接続表現や偶発表現で転換点を効果的に示すのに対し、学習者は意外性を表現するために様々な表現を組み合わせるよう工夫する傾向がある。発現場面では、前件・後件が明示される場合、母語話者は「と」「たら」「ところ」などの条件接続助詞で偶発性・意外性を効果的に表現するが、学習者(韓国語話者以外)は

主に「て」「てから」「とき」による時間的順序の叙述にとどまる特徴を示している。

また、談話の場面別における条件表現の文脈展開機能を観察した。日本語母語話者は、場面の性質や物語のリズムに即した適切な表現を選択していることが示された。発現場面では「とき」「間」などを用い穏やかな同時進行を示し、きっかけ場面では「と」「たら」「ところ」により展開や意外性を生み出し、ストーリーを前進させる。発見場面では「と」「たら」「ところ」を用い新たな認識や予想外の結果を簡潔に表す。日本語母語話者は各場面に応じて条件表現の文脈展開機能を的確に使分け、物語の流れとリズムを自然に構築していることが確認された。「と」「たら」は、前件を契機に後件を展開させ、物語に動きと意外性を与える機能を持つことが示された。したがって、学習者はこれらの条件表現を運用する際には、場面や物語のリズムに応じて適切に使分けなければならない。

本稿は中級レベルの学習者を対象としたが、今後縦断コーパスのデータを用いて、日本語学習者による接続表現の使用実態を日本語能力別に詳細に分析し、その発達段階を明らかにすることを目指したい。

## 参考文献

- 庵功雄・高橋信乃・中西久美子・山田敏弘（著）松岡弘（監修）（2007）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』東京：スリーエーネットワーク。
- 庵功雄・高橋信乃・中西久美子・山田敏弘（著）白川博之（監修）（2008）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』東京：スリーエーネットワーク。
- 石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子・劉洋（2009）「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋大学留学生センター紀要』12: 73-85.
- 市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』東京：教育出版。
- 市川保子（2011）『中級日本語文法と教え方のポイント』東京：スリーエーネットワーク。
- 久野暲（1973）『日本文法研究』東京：大修館書店。
- 厚生労働省（2025）『「外国人雇用状況」の届出状況まとめ（令和6年10月末時点）』[https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_50256.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_50256.html)（2025年9月4日閲覧）
- 国際交流基金（2023）『海外の日本語教育の現状 2021年度 海外日本語教育機関調査より』<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey2021/all.pdf>（2025年8月31日閲覧）
- 小口悠紀子（2017）「談話における出来事の生起と意外性をいかに表すか—中級学習者と日本語母語話者の語りの比較」『日本語／日本語教育研究』8: 215-230.
- 佐久間まゆみ（1992）「接続表現の文脈展開機能」『日本女子大学紀要 文学部』41: 9-22.
- 佐久間まゆみ（2002）「3 接続詞・指示詞と文連鎖」仁田義雄・益岡隆志（編）『日本語の文法4 複文と談話』119-189. 東京：岩波書店。
- 迫田久美子（2020）「I-JAS 誕生の経緯」迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬（編著）『日本語学習者コーパス I-JAS 入門：研究・教育にどう使うか』2-13. 東京：くろしお出版。
- 砂川有里子（2017）「第9章 ストーリーテリングにおける順接表現の談話展開機能」庵功雄・石黒圭・丸山岳彦（編）『時間の流れと文章の組み立て 林言語学の再解釈』183-215. 東京：ひつじ書房。
- 田山のり子（1982）「現代日本語における「ところ」：その意味と用法」『国語学研究所と資料』6: 1-11.
- 董芸（2020）「日本語学習者の作文における並列・継起の接続表現の習得—中国語母語話者の縦断コーパスの分析を通じて—」『国立国語研究所論集』19: 127-138.
- 豊田豊子（1978）「接続助詞「と」の用法と機能（III）—後件の行われる時を表す「と」—」『日本語学校論集』6: 92-110.
- 豊田豊子（1979）「発見の「と」」『日本語教育』36: 91-109.
- 中里理子（1994）「「ところ」の接続助詞的用法について」『学校法人佐藤栄学園埼玉短期大学紀要』3: 141-149.

- 中島悦子 (2007) 『条件表現の研究』 東京：おうふう。
- 蓮沼昭子 (1993) 「「たら」と「と」の事実適用法をめぐって」 益岡隆志 (編) (1993) 73–97.
- 蓮沼昭子・有田節子・前田直子 (2001) 『セルフマスターシリーズ7条件表現』 東京：くろしお出版。
- 原田朋子 (2005) 「接続表現から見た文脈展開——日本語母語話者と上級日本語学習者の小論文比較——」 『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』 5: 103–120.
- 範海翔 (2013) 「日本語母語話者と中国人日本語学習者の意見文における論理的な文脈展開に関する比較研究」 『現代社会文化研究』 47: 251–265.
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文条件文と原因・理由文の記述的研究』 東京：くろしお出版。
- 正宗美根子 (2001) 「‘ところ’の用法について」 『北陸大学紀要』 25: 97–105.
- 益岡隆志 (編) (1993) 『日本語の条件表現』 東京：くろしお出版。
- 孟慧 (2021) 『日本語の事実条件文：コーパス調査を中心に』 東京：専修大学出版局。
- 文部科学省 (2022) 『日本語教育実態調査 令和5年度 報告 国内の日本語教育の概要』 [https://www.mext.go.jp/content/20241101-mxt\\_chousa01-000038170\\_02.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20241101-mxt_chousa01-000038170_02.pdf) (2025年8月31日閲覧)
- Le Thi Minh Hang (2005) 『Câu điều kiện trong Tiếng Việt (có so sánh với Tiếng Nhật) [ベトナム語の条件文—日本語との比較を通して—]』 博士論文, ホーチミン国家大学。

### 関連 Web サイト

- 国立国語研究所「多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)」 <https://www2.ninjal.ac.jp/jll/lhaj/ihome2.html> (2021年5月27日閲覧)

## The Use of Conditional Expressions in Contextual Development Functions by Japanese Language Learners: An Analysis of Conjunctive Expressions Used to Describe Scenes in Storytelling

LE Thi Thu Ha

Graduate Student, University of Tsukuba / Adjunct Researcher, NINJAL

### Abstract

This study compares the use of connective expressions by Japanese language learners and by native speakers, by analyzing the contextual development functions of conditional expressions. Using the I-JAS corpus, the research investigated expressions used by intermediate-level learners and by Japanese native speakers, across three scenes: “hatsugen”, “kikkake”, and “hakken”. The results revealed that while native speakers concisely express contingency using “to,” “tara,” and “tokoro,” learners showed limited use of conditional expressions, relying instead on temporal connective particles such as “toki,” “te,” and “te kara.”. Learners demonstrated a pronounced tendency to remain within a temporal sequential narration, revealing operational challenges in employing conditional expressions for narrative development.

**Keywords:** conditional expressions, factual conditional sentences, one-time conditional sentences, contextual development functions, native Vietnamese speakers